

ニ ュ ー ス

日本の火山活動概況 (2005年5月~6月)

気象庁

利点があるが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。

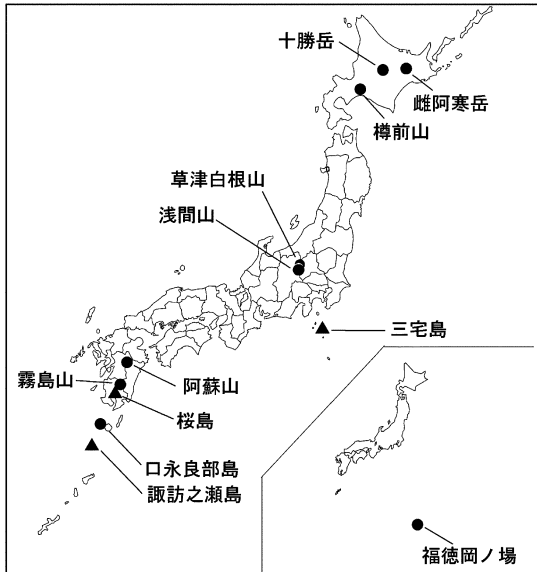


図 1. 2005年5月~6月に目立った活動があった火山

▲: 噴火した火山

●: 活動が活発な状態にあるか、もしくは観測データ等に変化があった火山

●雌阿寒岳 (43°23'12"N, 144°00'32"E)

※各火山の位置は世界測地系による。

ボンマチネシリ 96-1 火口は高温状態が続いていたが、2000年以降徐々に低下傾向が認められていた。6月5日~10日に実施した調査観測では、同火口の温度は約300°Cで(赤外放射温度計¹⁾による)、前回(2004年10月約340°C)よりさらに約40°C低下しており、同火口としては平常時のレベルまで下がったと考えられる。

噴煙活動は2000年以降やや低下した状態が続いており、火山性地震及び微動の発生状況も静穏な状態が続いている。GPSによる地殻変動観測でも火山活動に関連すると思われる変化は見られなかった。

¹⁾ 赤外放射温度計及び赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感じて温度もしくは温度分布を測定する測器であり、一方、熱電対温度計はセンサーを直接熱源に当てて温度を測定する測器である。前者は、熱源から離れた場所から測定することができる

●十勝岳 (43°25'05"N, 142°41'11"E)

62-2 火口の噴煙活動は活発な状態が続いており、噴煙の高さは火口縁上概ね200mで推移した。6月20~23日に行った調査観測では、62-2 火口の最高温度は約300°Cで(赤外熱映像装置¹⁾による)、引き続き高温であった(前回2004年9月12日は約200°C)。期間中、噴煙活動に特に変化が見られていないことから、同火口の熱的な活動にも大きな変化はなく、高温状態が続いていたと推定される。

6月28日13時17分頃から継続時間約1分の振幅の小さな火山性微動が観測された。微動の発生源は62-2 火口周辺と推定される。微動発生時、62-2 火口の噴煙の状況に変化は見られず、地震活動や地殻変動にも特段の変化はなかった。火山性微動が観測されたのは昨年11月17日以来であった。

期間中、地震活動には変化はなく、GPSによる地殻変動観測では火山活動に関連すると思われる変化は見られなかった。

●樽前山 (42°41'26"N, 141°22'36"E)

5月25日及び6月29日に実施した調査観測によると、A 火口²⁾の最高温度(赤外放射温度計¹⁾による)は約560°C(5月25日)及び約580°C(6月29日)、B 噴気孔群²⁾の最高温度(熱電対温度計¹⁾による)は約440°C(5月25日)で、いずれも高温の状態であった(前回2004年10月の観測では、A 火口は約620°C(10月25日)、B 噴気孔群は約430°C(10月15日))。A 火口及びB 噴気孔群の噴煙の状況には特に変化はなかった。

火山性地震の発生状況に特に変化はなく、火山性微動は観測されなかった。また、地殻変動観測では火山活動に起因すると考えられる変化はなかった。

²⁾ A 火口は山頂ドームの南東麓、B 噴気孔群は同南西縁に位置する。

●草津白根山 (36°37'22"N, 138°31'55"E (本白根山))

5月11日20時~12日03時に、白根山の山体浅部が震源と推定される規模の小さい地震がやや多く発生した。1日あたりの地震回数は11日15回、12日7回であったが、その他の日は0~3回と少ない状態であった。火山性微動は観測されなかった。

監視カメラ³⁾による観測では噴煙は観測されなかった。また、地殻変動観測では火山活動に起因すると考えられる変化はなかった。

³⁾湯釜の南約1kmの逢ノ峰に設置。

●浅間山 (36°24'23"N, 138°31'23"E)

山頂火口からの噴煙活動は引き続き活発で、白色噴煙が連続して噴出しており、高さは最高で火口縁上1,000mまで上がった。また、夜間に山麓の高感度カメラ⁴⁾で微弱な火映がほぼ連日観測されており、火口内は引き続き高温状態が継続していると推定される(図2)。

5月19日及び6月24日に行った火山ガス観測では、二酸化硫黄の放出量は1日あたり約1,400~1,900トン(5月19日)及び約600~1,800トン(6月24日)で、今年4月以降減少する傾向が見られるが、依然としてやや多い状態が続いている(図3)。

上空から行った観測⁵⁾によると、火口内が確認できた5月25日及び6月7日の観測では(5月25日は火口底の南側から西側にかけての一部)、火口内の状況に特段の変化はなかった。火口内の最高温度は383°Cで(6月7日、赤外熱映像装置¹⁾による)依然として高温状態であった(前回2月9日は465°C)。火口周辺の地形に特段の変化はなかった。

火山性地震の回数は、今年4月以降減少する傾向が見られるが、依然としてやや多い状態が続き、1日あたり27~69回で推移した(図2)。震源はほとんどが山頂火口直下の深さ約1~3kmに集中しており、前期間までと比べ特段の変化はなかった。6月15日に微弱な空振を伴う振幅のやや大きな低周波地震が発生したが、天候不良のため噴煙の状況は不明で、その他の観測データには特に変化は見られなかった。火山性微動の回数もやや多い状態が続いており、1日あたり0~14回で推移した(図2)。

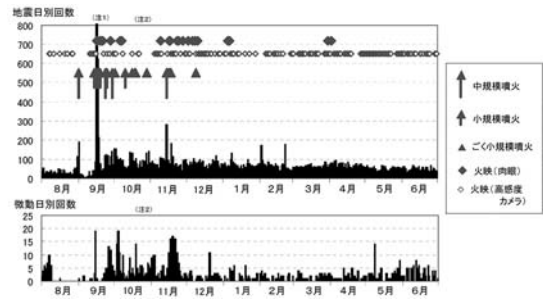
傾斜計及びGPSによる地殻変動観測、光波測距観測では火山活動に起因すると見られる変化はなかった。

⁴⁾気象庁及び国土交通省関東地方整備局利根川水系砂防事務所が山麓に設置。

⁵⁾5月10日、25日及び6月7日に、群馬県及び長野県の協力により、気象庁と東京大学、または気象庁と産業技術総合研究所が共同で実施。

▲三宅島 (34°04'37"N, 139°31'34"E)

5月18日にごく小規模な噴火が発生した。18日午前に行った現地調査で、山頂火口の北~北北東側約4km(神着地区)の狭い範囲でごく微量の火山灰が確認された。噴火時刻は、空振を伴う振幅のやや大きな低周波地震が観測された02時41分頃と推定されるが、その当時



(注1) 9月16日の地震回数は1,406回。

(注2) 10月23日は新潟県中越地方の地震により18~23時の計数不能。

図2. 浅間山 2004年8月~2005年6月の噴火、火映、地震及び微動の日別発生状況

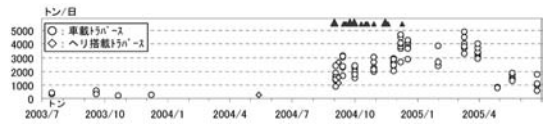


図3. 浅間山 二酸化硫黄放出量の推移(1日あたりの量に換算)(2003年7月~2005年6月) 大きい▲は中爆發, 小さい▲は小噴火以下を示す。

の噴煙は白色で高さは火口縁上200m、噴煙量に特段の増加は見られなかった。噴火が発生したのは4月12日のごく小規模な噴火以来であった。

噴煙活動は引き続き活発で、白色噴煙が山頂火口から連続的に噴出した。期間中の噴煙の最高は火口縁上700mであった(前期間の最高は火口縁上1,000m)。

上空から実施した火山ガスの観測⁶⁾では、二酸化硫黄の放出量は1日あたり2,500~5,400トンと依然として多い状態であった(図4)。なお、三宅村の火山ガス濃度観測でも、山麓でたびたび高濃度の二酸化硫黄が観測されている。

5月24日の上空からの観測⁶⁾では、山頂火口周辺及び火口内の状況に大きな変化はみられなかった。火口内の最高温度は210°C(赤外熱映像装置¹⁾による)で大きな変化はなく引き続き高温であった。また、全磁力の連続観測では特に変化はみられず、地下の熱的な状態に大きな変化はないものと考えられる。

地震活動は、上記の噴火を伴う低周波地震のほか、5月31日に一時的な増加があり99回観測されたが、その他の日は1日あたり0~27回と少ない状態が推移した。5月31日は14~21時に山頂火口直下を震源とするやや低周波地震が増加した。その間の17時40分には空振を

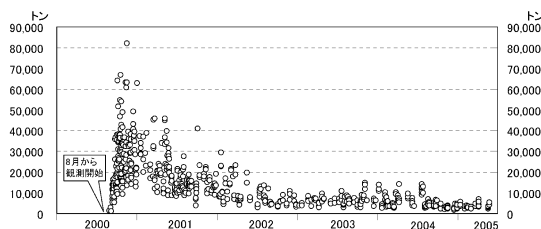


図 4. 三宅島 二酸化硫黄の放出量（1日あたりの量に換算）（2000年8月～2005年6月）
2004年秋以降は1日あたり2千～5千トン程度で、依然として多い状態が続いている。

伴う振幅のやや大きな低周波地震が観測され、三宅村神着で震度1が観測された。しかしながら、地震発生時の噴煙は白色で噴煙量の増加は認められず、その直後に行った現地調査でも降灰は確認されなかった。また、その他の観測データにも特に異常は見られなかった。また、5月19日10時05分に山頂火口直下を震源とするやや大きな高周波地震が発生し、三宅村神着で震度1が観測された。この地震が発生した前後で地震の増加はみられず、火山活動に特段の変化はみられなかった。

GPSによる地殻変動観測では、山体浅部の収縮を示す地殻変動は徐々に小さくなりながら、現在も継続している。

- ⑤ 5月17日、5月24日及び6月7日に、航空自衛隊、東京消防庁及び警視庁の協力により気象庁が実施。5月17日及び6月7日は、天候不良のため火口内の状況は不明であった。

●**福徳岡ノ場 (24°17.1'N, 141°28.9'E)**

海上自衛隊が5月18日に行った上空からの観測によると、福徳岡ノ場付近の海面に火山活動によると思われる薄い緑色の変色水が確認された。変色水は福徳岡ノ場付近から北方に幅約700m、長さ約9kmにわたって帯状に広がっていた。福徳岡ノ場付近で変色水が確認されたのは今年3月9日以来である。

●**阿蘇山 (32°53'01"N, 131°05'49"E (中岳))**

中岳第一火口（以下、火口）では、監視カメラ⁷⁾による観測で、5月31日夜に火口底北側噴気孔付近で赤熱現象⁸⁾が観測された。赤熱域はごく一部と狭く、その他の現象には特段の変化は見られなかった。火口底で赤熱現象が観測されたのは1992年12月30日以来であった。その後、夜間の現地観測で⁹⁾、引き続き火口底の北側の一部に赤熱現象が確認された。赤熱の範囲は6月3日と8日の間でやや拡大したが、8日と15日の間は変化な

く、15日と23日の間にわずかに拡大した。

現地観測⁹⁾によると、火口底温度は赤熱現象が発生している付近で194～236℃と高い値が観測された（赤外放射温度計¹⁾による）。火口内の湯だまり¹⁰⁾量は、期間の始めは約2割であったが、減少傾向が続いて6月8日以降は約1割となった。湯だまりの色は、5月中旬に降雨の影響で一時灰色になったが、その他の期間は黒灰色で推移した。湯だまりの表面温度は66～77℃と依然として高い状態であった（赤外放射温度計¹⁾による、前期間は66～78℃）。湯だまり内では引き続き高さ2～5mの土砂噴出が多数観測された。

4月16日から振幅の大きくなっていた火山性連続微動は、5月7日頃まで振幅のやや大きい状態が続き、6月6日未明からは振幅が小さくなった。その後、微動の振幅は6月10日夜～14日未明に一時やや大きくなったが、その他の期間は小さい状態で経過した。6月10～14日の振幅増大時に、その他の観測データには特に変化は見られなかった。

孤立型微動の発生回数は徐々に減少し、月回数は5月が3,269回、6月が1,843回であった（前期間は3月が2,260回、4月が4,743回）。火山性地震の発生回数も減少し、月回数は5月が216回、6月が298回と少ない状態で経過した（前期間は3月が1,112回、4月が865回）。

噴煙の状況は、期間を通じて白色で、噴煙高度の最高は火口縁上700mと通常と比べ変化はなかった。GPSによる地殻変動観測及び今期間実施した全磁力の繰り返し観測でも火山活動に起因する変化はみられなかった。

⁷⁾ 阿蘇火山博物館が中岳第一火口縁に設置。

⁸⁾ 赤熱現象は、地下から高温の火山ガスなどが噴出する際に、周辺の地表面が熱せられて赤く見える現象。阿蘇山では、赤熱域が拡大すると、火孔が開孔し、噴火活動が活発化したことがある。

⁹⁾ 現地観測を5月2、5、7、8、12、17、20、26及び31日、6月2、4、8、15及び23日に実施。夜間の観測を6月3、8、15及び23日に実施。

¹⁰⁾ 湯だまり：活動静穏期の中岳第一火口内には、地下水などを起源とする約50～60℃の緑色のお湯がたまっており、これを湯だまりと呼んでいる。火山活動が活発化するにつれ、湯だまり温度が上昇・噴湯して湯量の減少がみられ、その過程で土砂を噴き上げる土砂噴出現象等が起り始めることが知られている。

●**霧島山 (31°56'03"N, 130°51'42"E (韓国岳))**

御鉢火口内で2003年12月に確認された噴気孔からの噴気活動は、消長を繰り返しながらも依然としてやや活

発で、火口縁上 50~400m まで上がる噴気が時々観測された。

新燃岳付近及び御鉢付近の地震活動は低調で、火山性微動は観測されなかった。GPS による地殻変動観測では火山活動に起因する変化はみられなかった。

▲桜島 (31°34'38"N, 130°39'32"E (南岳))

今期間、爆発的噴火 (以下、爆発) が 1 回観測された。爆発は 6 月 2 日 07 時 36 分に発生したが、噴煙等は悪天のため不明であった。爆発が観測されたのは今年 1 月 23 日以来であった。ごく小規模な噴火は時折発生しており、鹿児島地方気象台 (南岳の西南西約 11 km) で 6 月 8 日に 1 m² あたり 1 g 未満の微量の降灰量が観測された¹¹⁾。同気象台で降灰が観測されたのは今年 1 月 23 日以来であった。

火山性地震は少ない状態で推移した。また、桜島直下 20~30 km 付近では時折深部低周波地震が発生しているが、6 月 25 日 16 時 23 分に南岳の南南東約 4 km、深さ海面下 23 km で発生した地震は、2000 年 10 月に深部低周波地震の観測が行えるようになって以降で最も規模の大きなものであった (マグニチュード 2.1 (暫定値))。

GPS による地殻変動観測では、長期的な東西方向のわずかな伸びの傾向が続いている。

¹¹⁾ 降灰量は前日 09 時~当日 09 時の総量を観測している。

●口永良部島 (30°26'36"N, 131°13'02"E (古岳))

火山性地震及び微動の活動は、消長を繰返しながら、やや多い状態が続いている。火山性地震の月回数は 5 月 100 回、6 月 61 回であった (前期間は 3 月 170 回、4 月 72 回)。震源の位置が決められた地震は 5 個で、いずれも新岳火口付近のごく浅い所に分布した。

火山性微動は継続時間の短いものが時々発生し月回数は 5 月 35 回、6 月 28 回であった (前期間は 3 月 21 回、4 月 23 回)。微動は、5 月 1 日に日回数 8 回とやや多く観測され、6 月下旬には振幅の大きなものが発生した。

監視カメラ (新岳の北西約 4 km に設置) による観測では、噴気は観測されなかった。

▲諏訪之瀬島 (29°38'18"N, 129°42'50"E (御岳))

噴火が 5 月 20~21 日、5 月 26 日~6 月 3 日及び 6 月 7 日に観測された。

活動は 5 月 30 日夕方から活発になり、爆発的噴火 (以下、爆発) が時々観測された。活発な状態は 6 月 3 日まで続いた。爆発は、6 月 1 日に 7 回観測されるなど、5 月 30 日~6 月 3 日の間に合計 20 回観測された。爆発が観

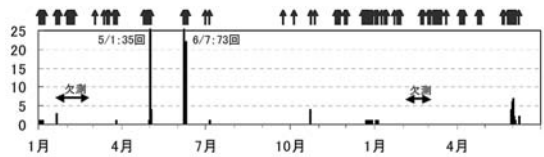


図 5. 諏訪之瀬島 爆発地震の日別発生回数及び噴火の発生状況

(2004 年 1 月~2005 年 6 月) ↑は噴火発生日
爆発地震は爆発的噴火に伴って発生する地震。
2004 年 1 月 22 日~2 月 26 日、2005 年 2 月 6 日~
3 月 3 日は観測機器故障のため欠測。

測されたのは、今年 1 月 4 日以来であった (図 5)。その後、爆発は 6 月 7 日にも 2 回観測された。

十島村役場諏訪之瀬島出張所 (以下、出張所) からの報告及び監視カメラ¹²⁾の観測によると、期間中の噴煙の最高は 6 月 1 日 09 時頃に出張所から確認された火口縁上 3,000 m であった。出張所によると、5 月 20 日及び 5 月 30 日に集落 (御岳の南南西約 4 km) で降灰があった。

火山性連続微動が、5 月 23 日に観測された他、5 月 26 日夕方からは、振幅のやや大きいものが、噴火活動の消長に伴って 6 月 3 日朝まで断続的に観測された。その後はしばらく観測されなかったが、6 月 30 日に再び観測され始め、7 月 (期間外) に入っても続いている。

¹²⁾ 御岳の北北東約 25 km の中之島に設置。

(文責: 気象庁火山課 長谷川嘉彦)

○教員公募のおしらせ

【立命館大学理工学部物理科学科】

1. 公募人員: 助教授または専任講師 1 名
2. 所 属: 立命館大学理工学部物理科学科 (滋賀県草津市びわこ・くさつキャンパス)
3. 教育・研究分野:
地球科学: 模擬実験・数値実験・観測・データ解析など、さまざまな切り口から地球を学生達に見せて考えさせることができ、教育に非常に熱意のある方を募集いたします。文・社系学部の教養科目の担当・幹旋に責任をもち、また、卒業研究を含む理工学部物理科学科専門科目、修士論文の指導を含む理工学研究科の科目を担当して頂きます。研究については、現在の地球科学担当教員と協力して地球科学の様々な問題に取り組むことのできる方を望みます。
4. 着任時期: 2006 年 4 月 1 日
5. 応募資格: 着任時に博士の学位を有する者。着任時 35 才程度以下。

6. 提出書類:

- (1) 履歴書 (A4 版; 氏名, 生年月日, 連絡先, 学歴 (高等学校卒業以降), 学位, 職歴 (教育歴・担当科目歴も記載すること), 所属学会, 賞罰などを記載. 写真貼り付けのこと)
- (2) 研究業績リスト (A4 版; 査読の有無を区別し, 著者は全員の名前を明記すること. 競争的研究費の獲得状況なども記載すること)
- (3) 主要論文の別刷り 3 編程度 (コピー可)
- (4) 立命館大学教養教育と物理科学科専門教育に関する抱負 (A4 版; 1000 字程度以内)
- (5) 研究業績の概要 (A4 版; 1000 字程度以内)
- (6) 今後の研究計画 (A4 版; 1000 字程度以内)
- (7) 応募者について参考意見をうかがえる方 (2 名) の氏名と連絡先と e-mail

健康診断書は不要ですが, 採用決定までに立命館大学保健センターの健康診断を受けて頂く必要があります.

7. 応募締切: 2005 年 9 月 30 日必着

8. 応募書類送付先:

〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1-1-1
立命館大学理工学部物理科学科
学科長 倉辻比呂志

9. 注記: 封書を用い, 表に「地球科学人事 応募書類」と朱書きし, 書留郵便で送付して下さい. また, 応募書類の返送先を明記しておいて下さい.

10. 問い合わせ先: 立命館大学理工学部物理科学科

教授 小笠原宏
(地球科学 現担当教員)

E-mail: ogasawar@se.ritsumei.ac.jp

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに 6 月 30 日送信しました)

○教員公募のおしらせ

【岡山大学地球物質科学研究センター】

1. 公募の職種及び人員: 助教授または助手 2 名
2. 研究分野: 地球化学, 宇宙化学, 岩石学 (地球・惑星の起源, 進化及びダイナミクスを地球・宇宙化学的ならびに岩石学的な手法を用いて解析する. 当センターの研究者と協力して上記分野及び関連する分野における斬新な研究を行うとともに, 大学院生の教育にも積極的に参加し, 新しい研究領域を開拓する意欲的な方を歓迎する. 当センターは, 基礎地球科学の全国共同利用研究機関であるだけでなく, 本年 4 月 1 日から「地球物質科学研究センター」へ改組することにより, 国際共同研究を

実施しやすい体制を構築しつつある. また, 平成 15 年度には 21 世紀 COE プログラムの実施機関としてセンター単独で選定され, 国際的教育研究拠点の形成を目指している. 従って, 当研究センターの研究者には, 国内外の研究者と共同研究を行うための支援業務が要請されていると同時に, それに積極的に参加することも期待されている.)

3. 資格及び応募条件: 博士の学位を有すること. また, 表面電離型質量分析計, 安定同位体用質量分析計, 誘導結合プラズマ質量分析計, 二次イオン質量分析計, 透過型電子顕微鏡, 電子線プローブマイクロアナライザー等を用いた地球及び地球外物質の元素定量分析, 高精度同位体分析, 極微細組織解析等を経験し, 研究目的にあった分析技術の開発を行う意欲を有することが望ましい. さらに, 高精度分析の結果に基づいて, 他分野の科学者と協力しつつ新しい地球宇宙化学の建設に意欲的な人を望んでいる.

4. 公募締切: 平成 17 年 8 月 31 日 (水) 必着

5. 着任時期: 決定後なるべく早い時期を希望する.

6. 提出書類:

(1) 応募の場合

- ・履歴書
- ・業績リスト及び主要論文の別刷 (5 編以内)
- ・これまでの研究内容及び今後の研究計画・抱負書 (各 2,000 字程度)
- ・応募者について意見を求めることのできる方 2 名の氏名, 所属及び連絡先 (事前に応募することに関して了承を得ていること)

(2) 推薦の場合

- ・推薦書 (推薦者以外の者による意見書 1 通を添付のこと)
- ・履歴書
- ・業績リスト及び主要論文の別刷 (5 編以内)

7. 問い合わせ先: 岡山大学地球物質科学研究センター
分析地球化学部門 中村栄三

電話 0858-43-3745 (直通)

FAX 0858-43-2184 (事務室)

eizonak@misasa.okayama-u.ac.jp

ホームページ <http://www.misasa.okayama-u.ac.jp/>

8. 書類送付先:

〒682-0193 鳥取県東伯郡三朝町山田 827

岡山大学地球物質科学研究センター長

中村栄三 宛

「教員公募書類在中」と朱書きの上, 書留で郵送のこと

9. 選考方法: 岡山大学地球物質科学研究センター教授会で審査し, 同運営委員会の了承を得て決定する。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに7月22日送信しました)

○教員公募について

【静岡大学教育学部】

1. 職名・人員: 助教授・1名
2. 所属講座: 情報教育講座
3. 専攻分野: 情報科学
4. 担当授業科目:
 - (1) 学部:
 - ・情報科学に関わる科目: 情報システム, 情報ネットワーク, プログラミング演習 (JAVA 言語・C 言語など), マルチメディア, 情報と社会など (いずれも高等学校教員免許状 (情報) に関わる科目)
 - ・総合科学教育課程における自然科学系の講義・演習科目: 先端科学と社会など
 - ・情報科学に関わる全学共通科目 (教養科目)
 - (2) 大学院
 - ・情報科学・自然科学に関わる科目
5. 応募資格
 - (1) 学歴: 大学院博士課程修了又はこれと同等以上の学力を有する者
 - (2) 年齢: 39歳以下 (平成18年4月1日現在)
 - (3) その他: 静岡市又は静岡市周辺地域に居住できる者
6. 提出書類
 - (1) 履歴書 (市販の用紙可, 写真添付)
 - ※可能な限り, ワード又はテキスト形式で保存した CD-R 等を添付することが望ましい。
 - (2) 業績一覧表 (別紙書式により, 記載すること)
 - ※可能な限り, ワード又はテキスト形式で保存した CD-R 等を添付することが望ましい。
 - (3) 著書・論文等 (10点以内の現物又はコピーを添付すること)
 - (4) 現在までの研究業績の概要 (2000字程度)
 - (5) 本学での研究ならびに教育についての抱負 (2000字程度)
 - (6) 卒業証明書, 大学院修了証明書
 - (7) 成績証明書 (大学院のものに限る)
7. 選考方法: 静岡大学教育学部教員人事内規の定めに基づき審査の上, 教授会で決定する。
8. 採用予定日: 平成18年4月1日
9. 応募締切日: 平成17年9月30日 (必着)

10. 応募書類の送付先:

〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836
静岡大学教育学部長 宛

※「情報教育担当教員応募書類在中」と朱書きで表記し, 書留郵便又は郵便小包 (ゆうパック) で送付のこと。

11. 問い合わせ先:

静岡大学教育学部理科教育講座
熊野善介

E-mail: edykuma@ipc.shizuoka.ac.jp

応募書類の書式については, 別紙又は

<http://www.ed.shizuoka.ac.jp/intro/staff000.html> を参照のこと。

12. その他

(1) 必要に応じて面接を行う場合があります。ただしその際の旅費は自己負担になります。

(2) 審査結果については, 選考が終了次第本人宛てに通知いたします。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに7月25日送信しました)

○研究機関研究員公募のお知らせ

【東京大学地震研究所】

1. 職種 研究機関研究員 (特定短時間勤務有期雇用教職員 (非常勤))
2. 研究分野

(分野1) SAR 画像, 赤外画像などの衛星データを利用して, 火山・地震活動に関係する地殻変動, 熱異常などの解析研究を地震研究所 > 担当教員 (※) と共同で行う研究員を募集する。研究に必要な衛星データ受信設備やアーカイブシステムの立ち上げの補助もお願いする予定である。なお, 候補者の研究分野は問わないが, GPS, 画像解析など関連分野の研究経験があり, 将来衛星データ処理に基づいた火山・地震研究を推進する意欲のある方が望ましい。(※ 地震研究所担当教員は, 金子隆之助手, 青木陽介助手, 古屋正人助手の3名)

(分野2) 火山および地殻下部などの低周波地震発生 of 物理的メカニズムの解明について, 地震研究所担当教員 (*) と共同で取組む研究員を募集する。なお, 実験, シミュレーション, 観測など, 研究手法を問わず, 物理的メカニズムの解明に取り組む人を求める。現在の研究分野, 研究手法にはこだわらないので, 直接このような分野の研究に取り組んでいない層からの参入・リクルートも期待する。(※ 地震研究所担当教員は, 栗田敬教授)

3. 募集人員 (分野1) 1~2名, (分野2) 1名
4. 応募資格 着任時に博士の学位を有する者で, 応募する前に上記の担当教員に連絡してよく相談してある者.
5. 採用予定時期 平成17年10月1日以降の着任可能な日
6. 任期・再任 任期は着任日から平成18年3月31日まで.
再任は1回, 最大1年間(平成19年3月31日まで)可能とし, 再任の可否は, 任期中に実施される所定の成績評価による.
7. 待遇 東京大学特定短時間勤務有期雇用教職員の就業に関する規定の定めるところによる.
8. 選考方法 原則として書類選考. ただし面接を行うこともある.
9. 提出書類
 - ◎履歴書(市販用紙可, 大学指定用紙 <http://www.u-tokyo.ac.jp/per01/r01-j.html> も可)
 - ◎研究業績リスト(査読の有無に分類)
 - ◎主要論文の別刷り3編(学位論文は要旨のみ), コピーでも可
 - ◎研究歴(A4用紙2枚以内)
 - ◎採用後の研究計画(A4用紙2枚以内)
 - ◎推薦書がある場合は添付
10. 応募締切 平成17年9月5日(月)必着
11. 提出書類送付先

〒113-0032 東京都文京区弥生1-1-1
東京大学地震研究所人事係
電話 03-5841-5668

注意 封筒表に「研究機関研究員応募書類在中」と朱書きの上, 書留にて郵送のこと.
12. 問合せ先(公募全般について)

鷹野澄助教授
電話 03-5841-5760
メール takano@eri.u-tokyo.ac.jp
(分野1について)
金子隆之助手
電話 03-5841-5768
メール kaneko@eri.u-tokyo.ac.jp
(分野2について)
栗田 敬教授
電話 03-5841-5757
メール kurikuri@eri.u-tokyo.ac.jp

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに8月15日送信しました)

○文部科学大臣表彰と日本学術振興会賞の推薦依頼

火山学会に標記の推薦依頼が来ていますのでお知らせします.

日本火山学会長 渡辺秀文

A. 平成18年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞及び若手科学者賞受賞候補の推薦

※切:平成17年7月22日(金)

火山学会からの推薦となりますので, 希望される方には事務局まで「至急」連絡下さい。「科学技術分野の文部科学大臣表彰顕彰要領」をお送りします. なお, 推薦の最終判断は理事会で行います.

(必要書類)

1. 候補調査書(別添要領)
2. 候補調査書付属資料各種(別添要領)
3. 参考資料(別添要領)(特許公報, 研究論文, 新聞記事, その他参考となる資料)
4. 履歴書(別添要領)
5. 戸籍抄本(原本)
6. 候補者推薦書(若手科学者賞に限り別添要領)

(参考)

科学技術賞(開発部門, 研究部門, 科学技術振興部門, 技術部門, 理解増進部門)

若手科学者賞(萌芽的な研究, 独創的視点に立った研究等, 高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績を挙げた若手研究者個人)

B. 第2回(平成17年度)日本学術振興会賞受賞候補者の推薦(基本的には個人推薦です)

1. 対象者: 日本国籍を有する者又は我が国に永住を許可されている外国人であって, 国内外の学術誌等に公表された論文, 著書, その他の研究業績により学術上特に優れた成果を上げたと認められる者のうち, 平成17年4月1日現在以下の条件を満たす者とします.

- 1) 45才未満であること
- 2) 博士の学位を取得していること(博士の学位を取得した者と同等以上の学術研究能力を有する者を含みます.)
2. 総授賞数: 20件程度(第1回(平成16年度)は若手研究者25名を表彰)
3. 受付期間: 平成17年8月3日(水)~10日(水)(必着)
4. 提出先: 〒102-8472 東京都千代田区一番長8番地(FSビル7F)

独立行政法人 日本学術振興会総務部研究者養成課「日本学術振興会賞」担当

ホームページアドレス:

<http://www.jsps.go.jp/jsps-prize/>

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに6月27日送信しました)

○平成18年度深海調査研究課題及び「みらい」研究課題の公募について

独立行政法人海洋研究開発機構は、海洋に関する基盤的研究開発の一環として、深海調査研究及び海洋観測研究を推進するため、平成18年度に実施する。

「深海調査研究課題」及び「海洋地球研究船「みらい」研究課題」を現在募集中(平成17年7月1日~7月31日までの1ヶ月間)です。詳しくはウェブサイト <http://www.jamstec.go.jp/> 最新情報 What's New をご覧ください。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに6月30日送信しました)

○2006年度 女性科学者に明るい未来をの会「猿橋賞」候補者募集(応募締め切り:2005年11月30日)

女性科学者に明るい未来をの会より、「猿橋賞」候補者の推薦を依頼します。

下記の要領で応募して下さい。募集内容、応募用紙などは各学会事務局に送付してありますが、電子メールでお申出頂ければ、様式を添付ファイルでお送りします。また、<http://www.saruhashi.net/> からダウンロードできます。

- 1) 対象: 推薦締切日に50才未満で、自然科学の分野で、顕著な研究業績を収めた女性科学者
- 2) 表彰内容: 賞状、副賞として賞金30万円、毎年1件(1名)
- 3) 締切日: 2005年11月30日
- 4) 応募方法: 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由(800字程度)、略歴、推薦者(個人・団体)、及び主な業績リストを記入して、主な論文別刷10編程度(2部ずつ、コピーも可)を添え、5)の送付先までお送り下さい。
- 5) 推薦書類送付先:

〒100-0005 千代田区丸の内1-4-3

UFJ信託銀行リテール総括部

女性自然科学者研究支援基金 江川康治

(封筒には、「猿橋賞推薦書類」と明記して下さい。書類は、猿橋賞選考のために選考委員会などで用いられます。書類は返却いたしませんのでご了承下さい)

- 6) 問合せ先: saruhashi2005@saruhashi.net

(上記のお知らせは火山学会ホームページに掲載しました)

○第6回地震火山子どもサマースクール「霧島火山のふしぎ」

日本火山学会・日本地震学会では下記の要領で第6回地震火山子どもサマースクール「霧島火山のふしぎ」を開催します。

後援: 宮崎県教育委員会、鹿児島県教育委員会、国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所、鹿児島県地学会(予定)

体験しながら楽しく学ぶ火山や地震のしくみ
小麦粉やココアなどの食材で火山噴火の実験
霧島の自然に抱かれながら、火山学・地震学の最新の成果を学ぼう!

8月19日~20日 一泊二日

出発地 鹿児島市および宮崎市

宮崎県御池少年自然の家 御池火口湖、えびの高原など
募集は小学校5年生~高校3年生(定員40名)

参加費 6000円

申し込み先など詳細は下記のURLをご覧ください。

<http://sk01.ed.shizuoka.ac.jp/koyama/kirishima/>

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに7月5日送信しました)

○Cities on Volcanoes 4 についてのお知らせ

2006年1月にエクアドルで開催が予定されております Cities on Volcanoes 4 について、組織委員会から以下の連絡がありましたのでお知らせします。要約は以下の通りです。

- 1) アブストラクトの締め切りが一ヶ月延長され、9月1日となりました。
- 2) 現在噴火活動が活発化しているレベンタドール火山へのフィールドトリップが追加されました。
- 3) ガラパゴス諸島へのポストフィールドトリップ(2月2~9日)が追加されました。

詳細は下記のメールおよびウェブサイト

www.citiesonvolcanoes4.com

をご覧ください。皆様のご投稿をよろしくお願いたします。

防災科研 熊谷博之

CITIES ON VOLCANOES 4 CONFERENCE IMPORTANT ANNOUNCEMENTS ? CHANGE OF ABSTRACT DEADLINE

The Organizing Committee of the Cities on Volcanoes 4

Conference to be held in Quito, Ecuador from 23 to 27 January 2006 (www.citiesonvolcanoes4.com) would like to make the following announcements.

1/ Because of absences due to summer vacations and projects, the Committee has received many requests to provide additional time to submit abstracts. Consequently, the Committee has decided to postpone the abstract deadline from 1 August to 1 September 2005. The deadline for early registration remains at 16 September 2005.

2/ During the past months El Reventador volcano, east of Quito, has entered a very effusive stage of activity that has resulted in strombolian activity and continuous blocky lava flows that are slowly filling the caldera and heading for Ecuador's major petroleum pipelines, only three kilometers away. Knowing that many COV4 participants would be interested in seeing this activity, a special fieldtrip led by local volcanologists has been organized to visit the caldera and the lava flows, as well as to experience the Amazonian cloud forest and stay at Ecuador's best mountain spa? the Papallacta hot springs. Details can be obtained at www.ecuadorianjourneys.com and infocov4@ecuadorianjourneys.com.

3/ Additional Galapagos Tour……Because of conflicts with other post-meeting fieldtrips, it is necessary to offer an additional 8-day Galapagos Tour following the meeting (to be led by Pete Hall). It would begin on 2 February and finish on 9 February 2006, thus allowing COV participants to attend other official fieldtrips. Its agenda and cost would be similar to that of the other scheduled Galapagos trips.

Details can be viewed at www.ecuadorianjourneys.com and infocov4@ecuadorianjourneys.com.

Pete Hall

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに7月7日送信しました)

○シンポジウム「トレーサーを用いた水循環研究の現状と将来」

日 時: 2005年9月9日(金) 午後1時より午後5時20分

場 所: 日本学術会議2階大会議室
(東京都港区六本木7-22-34)

参加費: 無料

主 催: 日本学術会議大気・水圏科学研究連絡委員会陸水専門委員会

後 援: 日本水文科学会, 日本陸水学会, 日本地下水学

会, 日本火山学会, 日本地球化学会

次 第:

- ・開会挨拶 佐倉保夫(千葉大・陸水専門委員会委員長)
- ・趣旨説明 安原正也(産総研・陸水専門委員会トレーサー水文学小委員会委員長)
- ・13: 10-13: 50 森 和紀(日大)
「トレーサーによる湖沼の水循環解明—湖盆から流域スケールへの課題—」
- ・13: 50-14: 30 鈴木啓助(信州大)
「山地流域の水循環と物質収支」
- ・14: 30-15: 10 田瀬則雄(筑波大)
「地下水循環と硝酸汚染—ホットスポットとホットパス」
- ・15: 40-16: 20 大場 武(東工大)
「火山性流体の挙動と火山活動」
- ・16: 20-17: 00 風早康平(産総研)
「深部上昇水の特徴, 起源とフラックス」
- ・総合討論 鈴木裕一(立正大・陸水専門委員会委員)

紹介先: 産業技術総合研究所地質調査総合センター

安原正也

TEL: 029-861-2409

e-mail: masaya-yasuhara@aist.go.jp

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに8月3日送信しました)

○科研費特定領域研究「地球深部スラブ」第2回研究シンポジウムのご案内

科研費特定領域研究「スタグナントスラブ: マントルダイナミクスの新展開」(略称: 地球深部スラブ)の一環として研究シンポジウムを開催いたします。

1. なぜ、沈み込んだスラブはマントル遷移層付近に滞留するか
 2. なぜ、滞留したスラブは下部マントルに崩落していくのか
 3. スラブが崩落することによって何が起こるのか
- に焦点を当て、これらの問題の解明に向けた取組み・成果の講演と、今後の研究の発展に向けた議論を行います。これらに加え、ポスターによる研究発表も募集しております。このシンポジウムは、本特定領域のメンバーでない方、大学院生・若手研究者を対象に数名程度旅費のサポートが可能です。サポートを希望される方はポスター発表申込の際にその旨お申し出下さい(≠切厳守)。
- 日 時: 2005年11月10日(木) 午後~11日(金) 午後
- 場 所: 九州大学国際ホール
- 共 催: 日本地球惑星科学連合

詳細は HP <http://ohp-ju.eri.u-tokyo.ac.jp/tokutei/> をご

覧下さい。

(当面は <http://ohp-ju.eri.u-tokyo.ac.jp/sspsym/> をご覧ください。)

ポスター発表の申込は10月7日(金)までにHPから、11月10日(木)

12:50-13:00 主旨説明 深尾良夫(研究代表者)

13:00-15:35 セッション1:なぜスラブは滞留・崩落するか～その1～

講演者:宮町宏樹,川勝均,田島文子,大林政行,小山崇夫,亀山真典

コメンテーター:末次大輔

15:35-16:05 ポスター発表紹介

16:15-17:45 特別セッション:数値シミュレーションと地球科学

講演者:阪口秀,土屋卓久,Alik Ismail-Zadeh

11月11日(金)

09:00-11:05 セッション2:なぜスラブは滞留・崩落するか～その2～

講演者:桂智男,近藤忠,鳥海光弘,奥野淳一,本多了

コメンテーター:山崎大輔,中久喜伴益

11:05-12:05 ポスターセッション(その1)

12:55-13:55 ポスターセッション(その2)

14:05-16:00 セッション3:スラブが崩落すると何かどうなるか

講演者:金嶋聰,中川貴司,小木曾哲,浜野洋三

コメンテーター:大谷栄治,廣瀬敬,岩森光

16:15-17:00 総合討論

研究シンポジウムに引き続き、「スタグナントスラブー東アジアの沈み込み帯から探る地球の今」と題した一般講演会も開催。

○一般講演会のお知らせ

平成17年11月12日(土),福岡市天神エルガーラホール(7F中ホール)にて,高校生以上を対象とした一般講演会「スタグナントスラブー東アジアの沈み込み帯から探る地球の今」を開催します。参加費無料。

事前申し込み(10月22日(土)〆切)が必要です。

詳しくはHP <http://dyna.geo.kyushu-u.ac.jp/ssp/> をご覧ください。

問い合わせ先

〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門

吉岡祥一 TEL: 092-642-2646

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに8月15日送信しました)

○文部科学省科学技術振興調整費「第1回アジア科学技術フォーラム」

日時:2005年9月9日(金)10:00~17:30

場所:六本木ヒルズ森タワー49階タワーホール・オーデトリウム・スカイスタジオ

(東京都港区六本木)

参加費:無料(レセプション参加費は別途有料)

主催:科学技術振興機構

後援:文部科学省科学技術政策研究所,防災科学技術研究所

基調講演:有馬朗人(財団法人日本科学技術振興財団会長,元科学技術庁長官,元文部大臣)

第1分科会:科学技術政策 座長:阿部博之(総合科学技術会議議員)

テーマ名:アジアの持続的発展に資する科学技術政策のあり方

第2分科会:環境・エネルギー問題 座長:大塚柳太郎(独立行政法人国立環境研究所理事長)

テーマ名:アジアの持続的発展に資する環境・エネルギー分野の研究開発

第3分科会:自然災害対策 座長:片山恒雄(独立行政法人防災科学技術研究所理事長)

テーマ名:自然災害と社会,開発,そして科学技術ー先進国と途上国のパートナーシップを探るー詳しくは防災科学技術研究所ホームページ

(<http://www.bosai.go.jp/jpn/koho/event/event/ajia.html>) をご覧ください。

〈問い合わせ先〉防災科学技術研究所企画部研究企画チーム 電話:029-863-7784

○第17回国際堆積学会議(17th International Sedimentological Congress)開催のお知らせ

下記の通り,第17回国際堆積学会議(ISC2006)が福岡で開催されます。

主催:国際堆積学協会(International Association of Sedimentologists)・日本堆積学会・日本地質学会

会期:2006年8月27日(日)~9月1日(金)

場所:福岡国際会議場

国際堆積学会議は,国際堆積学協会が中心となって4年に1回世界各地において開催されてきました。東アジア地域での開催は初めてのことで,火山分野とは無縁と思われる会議ですが,今回は島弧である日本での開催を意識し,多数あるセッションの中で,下記の通り,火山活動に関連する特別シンポジウムと,テクニカル・セッションとが設けられています。

特別シンポジウム

Sedimentation in and around magmatic arcs in relation to tectonics and volcanism

Conveners: C. Busby (UCSB) and K. Kiminami (Yamaguchi Univ.)

テクニカル・セッション

Volcano-sedimentology (Theme 6)

Conveners: J. White (Univ. Otago), U. Martin (Würzburg Univ.), K. Nemeth (Massey Univ.) and K. Kano (GSJ/AIST)

このうち、テクニカル・セッションは IAVCEI Commission on Volcanogenic Sedimentation が提案しており、火山関係の研究者ができるだけ数多く参加できるよう、次の四つのサブ・セッションを設けています。

- Eruptions and tephra dispersal on land and under the sea
- Sector collapse, avalanches and lahars
- Calderas and volcanoclastic sediments
- Facies models in volcanic settings: volcanoes and hydrothermal systems

このほかにも多数のシンポジウムとテクニカル・セッションがあります。会議に関する詳細な情報は、ウェブ

サイト <http://www.isc2006.com> をご覧ください。会議の日程、参加費用等は以下のとおりです。

登録・要旨提出開始: 2005 年 10 月 1 日

[申し込み先: <http://www.isc2006.com>]

巡検その他の登録締切: 2006 年 1 月 15 日

講演要旨提出締切: 2006 年 2 月 28 日

講演要旨受理通知: 2006 年 4 月 15 日

ソーシャル・プログラム、宿泊予約、各種支払い締切: 2006 年 5 月 1 日

問合せ先:

〒110-0016 東京都台東区台東 4-27-5

秀和御徒町ビル 8F

(株)近畿日本ツーリスト EC ハウス内

第 17 回国際堆積学会議組織委員会事務局

e-mail: isc2006-ec@or.knt.co.jp

FAX: 03-5807-3019

参加登録料: 一般 30,000 円 (2006 年 5 月 2 日以降 40,000 円), 学生 10,000 円 (2006 年 5 月 2 日以降 15,000 円)

要旨投稿料: 12,000 円